

[明清の美術展によせて]

## 文姫帰漢図巻について

北方から侵入した匈奴に連れ去られた悲劇の女性として、後漢時代末の蔡琰(さいえん)(字は文姫)は、前漢時代の王昭君(明妃)と共に有名で、彼女たちの物語は古くから盛んに絵画化されました。

蔡琰(177~?)は、後漢の学者で琴の名手といわれた蔡邕(さいよう)(133~192)の娘で、博学な才女でした。興平年間(194~195)、董卓の乱に際して侵入した胡人の騎兵に捕らえられ、南匈奴の左賢王の妻となり、十二年間を異境で過ごし、二人の子供を生みました。父の蔡邕と親しかった魏の曹操(155~220)の力で中国の故郷に帰ることができましたが、その代わりに二児と引き裂かれるという新たな悲劇に遭いました。文姫は帰郷後にこの運命を楽曲と歌詩に表わしたといいますが、現存する「胡笳十八拍」については文姫の真作か否か議論が分かれています。胡笳は胡人の吹く葦笛(あしぶえ)のことで、その声調を琴の曲にうつしたのが胡笳曲です。但し、文姫の作とされる歌詩は南宋時代以降に流布したもので、中唐・劉商の替歌の方が広く知られており、この図巻の本文も劉商のもので

当館所蔵の画卷は全場面揃っており、画を順に見ていき

みましょう。第1拍は陳留の文姫の実家、胡兵の掠奪の場面です。第2拍は胡地に至る途上の旅路です。第3拍は文姫が左賢王と並んで座っています。第4拍は月を眺めて中国を思う文姫が描かれています。第5拍は食事時の風景で、画面左下方では野外で食事の支度をしています。宿営の場面の第6拍、夜宴を描いた第7拍、やはり幕舎の周囲を描いた第8拍と、異境での生活風景が続きます。第9拍は前景には中国を思い嘆く文姫の姿が、後景には二騎の胡人が雁を射ようとする光景が描かれています。第10拍では、生れた子供を抱いた文姫の姿が見えます。第11拍は第4拍と非常に似た構成です。鮮やかな緑色の印象が強い第12拍は、中国から来た使者に会う文姫の喜びが表わされています。第13拍は母子別離の場面で、この画卷の中で一つのクライマックスです。第14拍からは中国への帰路です。胡人に守られて進んで行く第14拍、見送りに来た胡人たちが帰って行く第15拍、文姫一行が中国へと近づく第16拍。そして、第17拍では中国の砦を望む所にまで至り、一行も幾分リラックスした感じですが、第18拍では再び文姫の実家、賑わう平和な陳留の街が描かれていま

す。

この十二メートルに及ぶ画卷には、類似した構成をもつ場面が多く認められ、それらは反復させたような効果があります。まず、第1拍・第18拍における故郷の陳留の光景では、構図的に完全に一致しています。それは、北宋時代の都である開封を描いた張叔端「清明上河図巻」(北京故宮博物院)に通じるものです。そして、第18拍到登場する、門前で居眠りする従者や街に賑わう人々の姿も「清明上河図巻」に見出すことができます。また、第2拍・第17拍の舞台は胡地に至るまでの中国の北方域です。この表現は北宋時代の華北系の山水画家である范寛を淵源とするもので、その雪景表現は李唐・夏珪といった南宋時代の画院画家に継承されました。例えば、梁楷「雪景山水図」(東京国立博物館)には、山頂により記号化した樹叢が、山間に砦が見えます。第14・15・16拍もこれに近い表現が認められます。その間にある場面は胡地を舞台としており、丸みを帯びた丘や変わった色の樹木は李贇華や胡瓌(こかい)の伝称をもった作品に身受けられます。さらに、そこに描かれた風俗は、近年発掘された庫倫など遼時代の墓の壁画に通じるものです。

「胡笳十八拍」を描いたもので画卷のものと同系統のものは、ボストン美術館の画冊、メトロポリタン美術館所蔵の画卷、南京博物院にある二本(そのうちの一本は蔡琰の原作歌が本文です)などがあ

ります。その中で南宋時代の原画に最も近いのはボストン美術館本ですが、残念ながら四場面しか現存しておりません。大和文華館本は十八場面揃うものの中で宋画を最も忠実に模写した明時代の模本と考えられます。

大和文華館本によって十八場面を揃って考えますと、この系統の「文姫帰漢図」では、南宋時代において、北方を再現=表象するための、絵画におけるコードに従っていることがわかります。似通った場面を反復させることで、こうしたまじりは鑑賞者に容易に伝わったものと考えられます。

南宋時代絵画史の基本文献である元・莊鷹「画継補遺」(1298年序)には、南宋初代皇帝である高宗(1107~1187)が劉商の詩を自ら書した李唐「胡笳十八拍図巻」を蔵していたことが記されています。南宋時代、中国の北半は異民族の金王朝が支配していました。この画に接した南宋の鑑賞者たちは、当時起こっていた多くの悲劇や生還劇を思い起したでしょう。注文字や画家はそうした思いを共有していたものと考えられます。しかし、そのメッセージは単に北方に対する脅威や連れ去られた人々の悲運のみならず、民族を超えて存在する母子の愛情をも含んでいたことは、親子睦まじい場面を描いた「文姫図」冊頁(ボストン美術館)や母子別離の悲劇の場面を描いた陳居中「文姫帰漢図」(台北故宮博物院)の存在によっても理解されます。(板倉聖哲)

文姫帰漢図巻(第18拍)



清明上河図巻(部分) 張叔端筆



雪景山水図 梁楷筆



季刊 美のたより No.118

平成9年2月20日

発行 大和文華館